何か特別な賞をもらったことはありますか？

山口春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
何か特別な賞をもらったことはありますか？

【Ｎコード】
Ｎ５００１Ｎ

【作者名】
山口春

【あらすじ】
賞って、賞状って何？
それは必要？不必要？
でも誰かからほめられたい。ほめてほしい。
そんなお話。

1．出会いと出会い（前書き）

ちょっと長いものを細かく分けようとすると、切る場所に悩む。そんな感じです。

1．出会いと出会い

何か「特別な」賞をもらったことがありますか？と聞かれたら、僕はなんということができるだろうか。賞状らしきものをもらった記憶はあるけれど、それは多くの小学生が、参加したことで必ずもらえるものと同じようなものばかりだし、お手本をそのまま写してもらった書道の賞状など、そこに価値があるとは思えない。

それに、特別な、といわれてしまうと僕はますます首をかしげてしまう。特別とは、一体どういった類のものなのだろうか。そしてそれはいったい誰にとってなのだろう。社会的に特別と認められる必要があるならば、その賞にはきっと希少性や限定的な条件でのみ与えられるといった制約が必要になるだろうし、あくまで僕個人にとって特別というのであれば、そこには何か思い出や、当時の背景といった、賞によって起こった具体的な変化や感想が求められるのだろう。

とすればやはり、僕は特別な賞には随分と縁がないことになる。それを寂しいと思わないのは、きっと僕がそれほど特別ということに価値を見出していないからなのかもしれない。それとも、特別な賞というものがそもそも存在しないということなのだろうか。ならば寂しくないに決まっているのだが、きっとそうではない。あくまで僕にとっては、ということに変わりはない。そうでなければ、世の中にあふれる賞の存在意義が消えてしまう。

では、と僕は自問した。賞とは一体何のためにあるのだろう。

そこで僕は賞とは切っても切り離せない、賞状の存在意義について少し考えてみる。

あなたは○○を優秀な成績で修めましたので、ここにこれを賞します。賞状には四角四面な文章でなんだかそんなことが書かれていたような気がするけれど、ああいったものは、確か個人の努力が実を結んだ証明の一種として与えられているはずだ。しかもそれは、

勝利した彼自身への証明ではなく、その努力を知らない多くの人々に対する、証明を行う。彼は努力し、何がしかの発表会か大会で他の努力してきた人たちよりもほんの少し前に出て、つまり、勝利した。それを知らない全ての人が、それを知らなければならない。いわば強制的に、彼の努力を讃える必要が私たちにはあるのだ。といった具合に、賞状は強い意思を持ってそれを私たちに伝える。しかし、本人は勝つための努力と、研鑽を一番よく分かっているし、同じ舞台で戦った人たちも、それを理解して彼の勝利を認めている。それでも、その事実を何かでどうしても具現化しなければならないというならば別だが、さて、どうだろうか。僕はそうは思わない。どうしても一番になりたい、という人はいても、どうしても賞状がほしい、という人はまずいない。実は、みな賞状の意味はよく理解しているのだ。彼の叫び声は、そうそう全ての人に届いたりはしない。

話を少し戻そう。ならば賞はなんのためにあるのか、だ。

賞状が賞と同意語でないことはよく分かったが、〜賞というものをとったということが、他人に賞賛を促させる効果があるとは思いがたい。ならば、賞は一体何をするのか。これは完全な僕の考えだから誤解しないで欲しいが、「今回のコンクールには非常に多くの応募があり、どれも素晴らしいものばかりでした。なので誰か一人を最も優れたものとして定め、以後こういったコンクールが開かれたときの指標（もしくは選考除外対象）とするために分かりやすくマーキングしておきます。」ということだと思う。つまり、タグだ。

しかし、一口にタグといっても、その効果はすごい。なぜなら、そのタグは、対象たった一つを、全てが一緒くたにされぐちゃぐちゃになった混沌のなべの中から、的確に見つけられるだけの存在感を持っているからだ。漫画を読まない人でもスラムダンクやドラゴンボールという名前は知っているし、洋楽を聴かない人でもグラミー賞だのなんだの取った曲だけは詳しかったりする。反論もあるだろう。それは街中で有象無象とともに耳に入ってくるものだ、雑音

と同様だ、と言われるかもしれない。そのとおりだと思う。
しかし、その情報を配信する人々がこの膨大な情報の社会から何かをピックアップするためには、何かしらの指標が必要なのだ。三日寝ていなくても思わず目に飛び込んでくるような、そんなタグが。
さて、前置きが長くなってしまったが、僕は賞がまったくの無意味だといっているわけではない。賞とはタグであるのと同時に、看板にもなる。商売道具にもなる。肩書きと言い換えることもできる。やはり、価値が付与されているのだ。しかし、価値は他人によって与えられるもので、自分が決めるものではない。じゃあ、自分が認めた自分のための賞はどうなる？今日はそんな賞の話。

エアコンが乾いた音を立てて動き続けている。禁煙になって久しい会議室は、なぜかタバコの煙が二本分くゆって、天井を白く覆っている。
パイプ椅子は軋んで、さびた歯車が無理やり駆動させる時計と同じように、耳障りな音を部屋に響かせていた。
年長の男が、唐突に口を開く。
「でね、君も知っていると思うんだけど」
男は、極端な小声で向かいの男に話しかける。机の真ん中で勢いを失い滑り落ちそうなその声を、向かいの男は何とかキャッチして耳に運んだ。
「はあ。なんすか？」
「ほら、君にも何か、ってやつだよ」
ああ、と若い男は少し笑って答えた。乾季のガゼルのような、少し歪んだ笑顔だった。
二人の男は、その会社の人間のようだ。一人は、アイロンという存在をこの世から消し去ってしまったあとに流行るような、寂しいスーツを身に着けた５０代前後の男で、どうも対面で話す男の上司のようだった。もう一人の男はスーツすら着ていない。スラックス

のようなパンツと、少し前の開いたシャツを着て、何も言わなければ求職活動に疲れた学生か、パチンコ屋帰りのチンピラのようだ。がたがたと床と椅子がすれる。若い男はせわしなくパイプ椅子を揺らしている。全身が、もう帰りたいとつぶやいている。

「その話すか。俺は興味ないって言ったと思うんですけどね」

「だからね、興味とかの話じゃないんだよ。君、社報見てないの？」

「見ないっすよそんなもん。あんなもんはね、自己満足ですよ。調べました作りました、だから読めってならないっしょ。部長もそう思いません？」

部長と呼ばれた男は少し大げさにため息をついた。落胆のせいではない。部長だって彼と同じように、こんなところからはさっさと帰りたいに決まっているのだ。

「分かった、社報については今置いておこう。でね、話を戻すよ、いいかい。私たちは君に何か賞を与えなければならないんだけれど」

「はあ。別に何でもいいですよ。そんな賞もらえるようなことしてないと思うんですけどね」

そこなんだよ。そう言って部長は自分の鞄から一枚の紙を取り出した。尋問用の、生い立ちから全てをひっくり返して彼をどうにかして褒めるためのその用紙は、３０段階にわたって、彼を事細かに分析するための質問事項が羅列されている。年配の男はその文字を漠然と見る。それらは働きありのように細かくうごめいているようで、気持ち悪くなった彼は視線を外すために裏返してそれを机に置いた。

「君に何か賞を与えるにあたって、僕たちは君の何を評価すべきか調べなければならないんだ。少し質問に答えてくれるかい？」

若い男は、いいっすよ、でもさっさと終わらせましょうね、と言って足を組んだ。ズボンのすそが少し短いのか、隙間から見える彼の足はずいぶんと貧相で、かいわれ大根を想起させた。そこには誰も必要としない時間があった。ずいぶんと安売りされた時間だ。

「君は入社何年目だったかな？」

「二年目だったかな。そんなん知ってるっしょ？そっからすか？時間かかりません？」
「いいから。早く終わらせるには、実は遠回りがいいことだってあるんだよ。」
「そうっすか。じゃあさくさく答えますんで、よろしくお願いします」
「じゃあね、君は遅刻、欠勤はあるかね？」
「ありますよ。自慢じゃないんですけど、朝はほんとに弱くて」
　ずいぶんと暖房が効いているのか、部屋は乾いて、重く、暑い。部長が無意識に上着を脱ぐ。裏地は驚くほどに上品で、若い男もそれに食いついた。それいいですね。高いでしょ？部長は口を開かない。余計なことを言って、彼との距離を縮めたくはなかった。
「そうか。じゃあ、何か会社からすでに表彰されたりは・・・それはないんだったね。組合活動なんかはどうかな？」
「あんなのめんどくさくてやってらんないっすよ。どうせ暇な人がやってくれるんだし。俺も大体彼らと同じ意見なんで、俺が行く必要はないっす。」
「なるほどね。入社したときの志望動機とかは、聞いてもいいかな」
「いいっすよ。あの～あれです、潰れないってやつ。忘れちゃったな」
「安定性とか、そういうものかな？」
「それそれ！安定性。オンシャのバンジャクなキバンと、人間的なソウゴウリョクに惹かれて入社しました！」
　部長は頭を抱えた。どう間違えば人事課はこんな社員を採用するのだろう。少なくとも景気がいいとは言えない今の時代に、こんな若者を扶養する余裕がこのちっぽけな会社にあるとは思えない。ならばそういったマイナス面を全て取っ払えるだけの才能が、能力が彼にあるのか？答えはノーだ。なぜなら彼は今まで一度もそういった表彰をされていないと言う。しかも私に、この何のとりえもない、年齢だけで持ち上げられた部長に、こんな人事考査まがいの仕事が

回ってきたということがそもそも何かおかしい。人事考査は直属の上司が、その普段の業務遂行能力、生活態度、もろもろを含めて行うものであって、私のような頼りにされていない人間が改まってするようなものではないはずだ。流通部門だぞ。人間の流通まで構ってられるわけがない。苛立ちを隠すように、努めて柔和に彼はコーヒーを飲もう、と提案した。小銭入れを出すと、若者はきっちり二人分の小銭を受け取って、注文も聞かず走り去っていった。

いっそこのまま帰ってこないでくれ、彼は本気でそう思っていた。話し合いが始まって２０分。白い紙は、さっき鞄から取り出したときよりも白く見えた。

僕は、高校生のとき小説まがいのものを書いて、夏休みの宿題として提出したことがある。高校三年生になるまで文章関係の宿題を全て短歌で通してきた僕としては、自分でもどんな心変わりかと思ったけれど、何のことはない、受験勉強に疲れた気分転換と現実逃避をかねた簡単なものだったと記憶している。

当時僕は、文章を書くということに関して何の楽しみも見出していなかった。小説というものは、直接会えば1分で終わるような会話を、だらだら小器用な比喩やら体言止めやら倒置法やら果てはいるのかどうか分からないような風景描写までひっくり返してバラバラに並べて、読者の想像力を掻き立てるのだかなんだか分からないけれど、とにかく面倒くさい作業を経て、それを何ページだかの紙に載せてやっとこさ伝えるものだと思っていた。でも、当時受験勉強をしているはずの僕は、一向にケッペンの気候区分以外の知識を蓄積しない自分の脳みそに嫌気が差していて、そのしちめんどくさい作業をやることが逆にとても魅力的に思えた。格好の時間つぶしを手に入れた、と僕はにやにやしながら原稿用紙を取り出した。

当時の僕を思い返せば、本を読むこと自体はそれほど嫌いではなかったように思う。ただ、余計な文章（と僕が感じるもの）が嫌い

だった。そのせいか太宰治は嫌いだったし、村上春樹は読むのにちょっとした体力を必要とした。

そんなわけで、僕は少しでも簡潔に物語を伝えるために設定を凝ることにした。そうすれば世界観の説明を最初にぶち込んでしまって、あとはそれを理解してもらうことで小器用な技法をいちいち用いなくても読んでいて楽しくなるだろうと思ったわけだ。

とは言うものの、何かを書いたことがない僕にとって、凝った設定というのはいったい何なのか分からない。

登場人物を増やして大勢でがやがやしゃべっても読みにくい。ファンタジーは想像力の乏しい僕には難しいし、何より幻想的な世界に興味がないから思いつきもしない。ならば、と僕は現実世界では認められないような職業をでっち上げ、まるでその不穏な職業が現実に存在するかのような話を書くことにした。今思えば陳腐な話なんだけど、その時は独創的で読みやすくて、一言で言えば完璧な世界観に思えた。

僕は一心不乱にシャープペンシルを走らせた。そして4時間後には、生まれて初めて何かを書いている途中に芯がなくなるという事態に陥った。サンダルを履くのもそこそこに、初めてコンビニまで芯を買いに行くためだけに自転車を走らせた。運動をしていない貧相な足腰は、自転車をちっとも前に進めない。レジは混んでいる。小銭がなかなか出てこない。その全てがもどかしく感じた。僕は随分と酔っていたんだと思う。何かを書くということに。現実逃避という快楽に。そして、誰も創造しないであろう世界に。

真夏のセミは、その寿命を賭して特定の何かに自分の存在を訴える。その音を、締め切られたガラスがはじき返す。エアコンのファンのうなり声が小さく響く。薄暗い部屋の中で、小さな明かりだけが僕の手元を照らす。僕は文字をつなげる。紙は埋められていく。僕の世界が、彼の世界が、走り続けていく。かくして、自己満足は速度を速める。

地理の教科書を放り投げ現実逃避に没頭しすぎた僕は、その小説

まがいを気がつけば二日ほどで仕上げてしまった。ただ、学校が宿題として提示した枚数は１５枚。張り切りすぎた僕が書き上げた文章は３０枚。これを宿題として学校に提出するためには、どうしても規定枚数と同じだけの量の言葉を削り取らなければならない。正直僕はその現実に焦った。あんなに簡潔に書いたつもりなのに、書いていけばいくほど書きたいことが増えていく。短くまとめたはずが、気がつけば同じようなことを繰り返し念仏のように唱えている。完成を実感し、ふと冷静になって読み返せば、僕の文章は僕が嫌いだと思っていた世界が満遍なく存在していて、そこには嫌悪していた彼らへの尊敬すら見て取れるようだった。僕は怖くなり、完成間近にしてその小説は引き出しに仕舞いこまれることになった。

しかし、時間は迫ってくる。夏期講習が始まり、登校日が増え、宿題の提出を迫られることで、僕は片付けた小説を引っ張り出してこなければならなくなった。まるでマラソン大会の前日のような気分だった。どう頑張っても自分が思うような結果は出ない。でも精一杯努力しなければならない。そのジレンマから僕は逃げ出したかった。やっぱり何の中身も思いいれもない短歌をさっさと書いて終わらせれば良かった。読書感想文ならば簡単だったのに。ほかのクラスの友人のものを写せばよかったのか。後悔ばかりが僕を襲った。小説を書いたことを後悔したわけではない。ただ、本当に、もう一度あれを読み直さなければならないことが、嫌だったのだ。

家に帰り、僕は引き出しを開けた。中には、きれいに折られた原稿用紙が明確な意思を持ってそこに鎮座している。机に広げ、僕はそれを読み返す。そして僕は、彼をさっぱり理解できなくなってしまっている事に気づく。文章と僕の乖離。すっかり他人の彼には、嫌悪も羞恥も感じない。あの頃の僕が、一体この文章のどこを大切に紡いだのかを思い出すこともできない。僕はペンを取り、文字の羅列に次々と線を入れ、粉々に砕く。そこには誰も必要としない世界があった。

独断と偏見で文章を削り、前後の辻褄を合わせ、体裁を取り繕い、

無理やり規定枚数で収めた僕の処女作は、読み返してみればなんのことはない、コレクション直前のモデルの体のようにげっそりとしていて、中身もなく、だしをとりきった鶏がらのようにスカスカになってしまっていた。それでも僕は何も感じなかった。強いて言えば、手元には宿題を終わらせたという、学生ならば誰もが当然持つであろう達成感だけがあった。

翌日、黒炭の削りかすに汚された原稿用紙は、宿題という名に加工され、僕の手元を離れた。

2．気温と温度

若者は、コーラとブラックコーヒーを机に並べて、どっちがいいすか？と部長に尋ねた。
「できれば私はコーヒーがいいんだけどね」
「そうすか。じゃあ俺コーラで」
彼はコーラと引き換えにお釣りを机にばら撒くと、自分の椅子に座り、部活帰りの中学生のようにその黒い液体を飲み始めた。見ているだけでのどが潤されるような、ＣＭに使いたくなるような気持ちのいい飲みっぷりだった。
「なんか暑くないっすかこの部屋。暖房消しますね」
彼は立ち上がると暖房を消しに向かう。部屋に戻ってきてから椅子に座っていた時間は三秒に満たないだろう。部長の手がやっと缶コーヒーのふたに伸びる。
「うわ！２８度とか！今は冷房じゃねえっつうの。ありえねえ」
彼は自分好みの設定温度に変更すると、満足げに机に戻ってきた。この間１５秒。彼がお使いに費やした時間が１０分だから、そのスピードは驚異的といえる。
「で、君は何のためにここに呼ばれているか分かっているよね？」
「はいはい、分かってますよ。じゃあ、続きお願いします」
部長は紙をもう一度見直す。やはり何も書いていない。疲れた壮年の休日が徐々に食いつぶされていく。
「出身はどこだったかな？」
「石川県です。金沢。結構都会っすよ」
「そうか。雪は多いのかい？」
「いや～、最近はそうでもないっすね。福井とか富山とか、あっちのほうが降るんじゃないすかね？」
「うん、じゃあ、どんな小学生だった？」
若者の顔がとたんに不機嫌になる。小刻みな貧乏ゆすりが聞こえ

る。苛立ちと侮蔑をこめて、彼は言葉を気だるげに吐き出した。
「すんませんけど、俺を表彰するんですよね？マジ、小学生とか関係ないっしょ？無駄なんで、もうちょいはしょってくれません？」
部長は端折る、と紙に書いた。漢字は小さく歪んで、随分と不細工に見えた。
「君は自分が周りからどのように見られているか考えたことはあるかい？」
「それもなんか関係ある質問すか？答える必要ないと思うんすけど」
「私は君をどうやって表彰しようか本気で悩んでいるんだ。はっきり言わせてもらうがね、こうやって一緒な時間をすごしていても全くいいところが見つからないんだよ。お手上げなんだ。僕がどれだけ君と話すことが苦痛か分かるかい？」
矢継ぎ早に部長がまくし立てる。彼の右手はペンを置き、コーヒーを取る。その冷たいブラックコーヒーを一気にのどに流し込む。どくどくと、血液のようにそれは彼の胃に流れ込んでいく。
「仕事だからと思ってね、特に面識のない君でもしっかりと表彰しようと思っていたんだ。どんな人間にでも素敵な部分が一つはある、というのが僕の身上だからね。でも、君は駄目だ。自分を評価してもらおうという気持ちが全く見えない。本当に、冗談抜きで、嫌われたいようにすら思える。僕だって困ってるんだ」
若者は狼狽する部長の表情をしげしげと眺めた。そして感情的に話す部長をどこか哀れんだ瞳で見つめていた。先ほどまでの彼の持つ目とは違う、彼を構成する組織の中で唯一、全うと思える視線だった。頭、肩、右手。視線は机の上の紙で止まり、端折る、と丸をつけられた文字を見つめる。
「それ、よく言われるんすよ、親とかにも。ただ、俺思うんすよ。話をするっつうのは、どっちかが一方的にしゃべっても駄目じゃないすか。二人でしゃべんないと。そんで、大概の大人は俺のなりとか行動とか見て、そんでもう、なんか、勝手に自分の考えを押し付けるって言うか、それって話し合うって言わないっすよね。おかし

くないっすか？」
コーラに手を伸ばして、残りを一気にのどに流し込む。炭酸のはじける痛みが自分を襲っている気がして、部長は眉をしかめた。
「じゃあ、まずだよ。自分の行動が間違っていると思うことはないのかい？」
「間違ってるならそうやって言ってくれればいいじゃないっすか。間違いを正す気もないのに知った振りして放っておくのが正解なんすか？そんで間違ってるから君の言っている話は聞きたくないとか、意味分かんないんすけど」

部長は一つ咳払いをした。そわそわした左手が胸ポケットからハイライトを取り出し、雄弁な右手が１００円ライターで火をつける。薄青い煙が空気をよじ登っていく。
「まあ、君の言っていることが全部間違っているなんて言ってはいないんだ。ただ、君の話し方とか、行動とか、社会人として少し目に余るものが多すぎて、社会人暦が長い私にとってそれがマイナス評価になっていた、ということなんだよ。だから確かに、君だけに当てはまる尺度で君を見ればきっと素敵なところが有るんだろうと思う。ただ、この人のここがいいところだ、というものは相対的であって、大多数がそういった評価を下す必要があるんだ。例えば、そうだな。君、趣味は何かね？」
「その前にちょっといいすか、部長。部長俺の名前知ってます？知ってるなら今だけでいいんで、君ってのやめてもらえないすか。俺そういう誰呼んでんのか分かんないのが一番嫌いなんで」
彼の純粋な願いによって、部長の腹の中に渦巻いていた「自分の土俵に運べている」というけなげな自信はあっさりと打ち砕かれた。彼は短くなったタバコを大きく吸い込む。部長が吐き出す息は、限界まで白い。
「分かったよ、山下君。山下君、と呼べばいいのかな？」
「まあ、そんなもんすね。いきなり下の名前で呼ばれても困るんで」

目の前の少年は満足そうに微笑んだ。その笑顔は、もしかしたら評価するに値するものだったのかもしれないが、部長は彼の顔を見ることを避けた。忍耐の世界だった。声のトーンを穏やかに、ゆっくりと、彼は言葉を並べる。

「山下君、君の趣味は何？」

「俺の趣味すか。なんすかね。ゲームとか、漫画とか、スロットとかすかね。あと連れとカラオケ行ったり、ドライブしたり、ボーリングしたりとか。別にこれといってはないすよ。」

「はまったこととかないの？」

「俺結構飽きやすいんすよ。なんだろ、趣味じゃないけど部活が一番長いかな。１０年。すごくないすか？しかも剣道ですよ、超マイナーだし」

部長はふと、最近の武道のあり方を一人嘆く。指導者の減少、低年齢化、後継者の問題、スポーツ然としすぎた日本の伝統。そうして、現状を今の自分に投影する。

こういった若者を先達は一体どうやって指導してきたのだろう。いや、指導を放棄したからこそこういった若者が生まれたのだろうか、ならば最終的に全ての生活指導を企業が担わなければならなくなる。とすれば、私たちの仕事は本来の部分から外れたところをスタートにしなければならない。それを時代だというのか。バカらしい。ならば私たちが辛酸を舐め、つき従ってきた上司たちは有能で、現代の若者を御せない自分たちが無能だと？それは連綿と続く時代の摂理だと言うことを横に置き、部長は若者を見つめた。そしてタバコを消し、タバコを吸った。のどの苦味が彼に現実を知らせた。

「そうか、でも一つのことを長く続けるということは、すごく大事なことだよ」

「あ、それうちの親父も言ってました。でも俺思うんすけど、やらされて続けても意味なくないすか？」

「君は自分の意思で部活を続けたんじゃないのかい？」

「部活ってそう簡単に辞めれないんすよ。きっかけもそもそも友達

がやろうぜって言ったんでやっただけだし。しかもそいつが体操やりたいとか言ってやめちゃって。何勝手にやめてんのって感じでしょ」
「そのときに山下君も辞めればよかったんじゃない？」
「俺別に体操なんてやりたくないし。まあ、とりあえず部活やっとけば友達もできたんでそれでいいかなって感じすかね。中学ん時もそんな感じです。どっちかって言うと部活終わった後みんなで遊ぶほうがメインだったし」
「自分で何かを決めないと、続けていても意味がないってことだね？」
「そうっすね。だから、そういう意味で言ったらあんまり自分で決めたことってないような気がするなあ。でもみんなそんなもんだと思うんすけど。部長はなんか自分でこれだ！って決めたことってありますか？」
うまく話を切り、山下は残りわずかのコーラを乾季の動物のように残り一滴まで丁寧に飲み干す。部長はタバコを置き、シャープペンシルを握った。ふと彼は、この会話の中に山下を見つけられるような気がした。宙に浮いていた意識をかき集めて、言葉を並べて彼の目を見る。それはこの不毛とも思われる会話が始まって初めてのことだった。
きっと彼は自分を良く分かっていないだけなのだ。多すぎる情報の中で自分が必要なものを取捨選択できなくなっているだけなのだ。だとすれば、私は彼に、「彼が必要なもの」を与えればいいのではないか。それできっとこの会話は終わる。彼のいいところもきっと見つかるだろう。たった、それだけのことだ。
コーラの缶が机とぶつかり、乾いた音を響かせる。コーンと高い音は部長の額を叩き、彼の意識を会話に戻した。
「私が？自分で決めたこと？それは自分の判断で決めたことということかね？」
「そうそれ。自分で全部責任取ります的なやつ」

「大して面白い話はないと思うがね」
部長の顔が少し得意げに笑う。積み上げた時間と経験が初めて生かされるが故の歓喜だろうか。山下には笑顔の意味が分からない。気持ち悪いと言いたげに彼は自分のタバコに火をつける。甘い匂いが鼻についた。
「面白くなかったら別に途中でやめてもいいんでしゃべってみてくださいよ」
さすがに、そう言った瞬間の部長のゆがんだ顔の意味は彼にも分かったのだろう。遠慮がちに続ける。
「あの、俺ちゃんと聞いてますからね」
部長の椅子が一段と高く軋んだ。

8月29日は宿題の提出日だった。夏休み中に夏休みの宿題を提出するという矛盾に学生のときは随分悩まされたが、僕はどちらかと言えば慌てふためく友人に秘密道具（完成された宿題とも言う）を貸与する側の人間だった。
先生が順に名前を呼び、両手に抱えた宿題を持って、優秀な女子生徒は悠々と、多くの男子生徒がばつが悪そうに黒板の前まで歩いてゆく。そして、用意された長い机の上に順番に、終えた宿題を並べていく。完成していないものがあれば名簿にチェックを入れ、提出日を明記しておく。そうして全員の提出が終わったとき、名簿の小説欄に名前を書いたのは僕ただ一人だった。当たり前だ。受験生に余分な時間などありはしない。クラス全員と、ついでに担任からも冷ややかな視線を浴びた僕は、それでも悠然とそれを提出した。
僕はきっちり、宿題という責務を果たした。それがたとえ読書感想文であれ、俳句であれ、いい歯のコンテスト作文であれ、チョイスした課題自体が問題になるものではない。結局、みんなが言いたいことは一つ、小説にお前が費やした時間を、周りは受験に充てていたのだという事実は揺るがない、ということだ。ならば、その事

実は試験の結果で覆せばいい。惜しむらくは、そこで僕の書いた小説に多少なりとも自信が、これを書いていたのならテストの点数が多少下がってもしょうがないかもしれないなと多くの人間が思うような魅力が、備わっていたならばよかったのにということだが、そのときの僕はもうすでに小説とは別の個であり、それを望むべくもなかった。

朝のオリエンテーションが終わり、授業までの１０分間の休憩中、トイレに行こうと教室を出た僕は、急に担任に呼び止められた。担任と個人的に口を利くことがめったにない僕にとって、声をかけられることはあまり喜ばしいことではなく、その時も不愉快な表情を表に出さないよう精一杯努力して彼に向き直ったことをよく覚えている。

僕の担任は、妙に芯の細い神経質な、そのくせ声だけは必要以上に大きな国語教師だった。

「おお、お前が小説書くなんて知らなかったぞ、面白かったら県のコンクールとかにも出すからな」

「そんな賞向きなもんじゃないですよ。途中から訳わかんなくなっちゃったんで」

「少なくとも、大して本も読んでないお前よりは俺のほうが文章は良く分かるぞ。専門だからな。そもそも、俺が面白いって思うようなもんじゃないのに、高校三年の夏休みに書いてくるわけないよな。高校生活の集大成！１０代の叫び！期待して読むからな」

担任はそう言うと、ずり落ちたメガネを片手で引きずりあげて廊下をゆらゆら歩いていった。

クラスメイトからは、奇特な奴だとか、俺にも読ませてくれだとか多少の反応はあったものの、その日の午後には僕の小説は忘れ去られ、同時に僕の記憶からも忘れ去られることになった。

むしろ、その後行われたテストの結果だけは忘れようもなかったことだけをしっかり付け加えておく。

「そもそも私は婿養子なんだよ」
「そうなんですか？じゃあ前の苗字は？」
「松田」
「それやばいっすよ！いじめられなかったですか？」
「君ぐらいの世代でも、いや、山下君ぐらいの年でも分かるのかい？」
「当たり前じゃないっすか！カリスマっすよ！でも俺は嫌だな。有名人と同じ名前にだけはなりたくない。　絶対比較されますからね。つうか１００パーがっかりされるし」
　部長は乾いた笑いで彼に答えた。確かに、彼は結婚前に女性からどこか哀れみにも似た視線を受けることが多かった。それは容姿のせいなのか、名前に伴う総合的なものなのかは分からないが、ついに彼がジーンズを履いたことは、少なくともこの５０年、一度もなかった。
「で、山下君も分かると思うけど、婿養子って言うのは、なかなか家に居場所がないものなんだ。ドラマや　小説なんかでよく嫁と姑の争いなんてのがあるけどね、ふたを開ければ婿養子ってのはあれよりもたちが　悪いかもしれない。家長は嫁の父だろ。確かに収入こそあるけれど、おおっぴらに趣味に走ることもでき　ないし、自由な時間もない。正直子供ができてからのほうが少し身動きが取れるような気分になったくら　いさ。一人目が男の子だったからね。うまく視線が向こうに向いてくれたんだな。」
　山下はさっきまでと違い、部長を正面から見て、静かに話を聞いていた。その様子が、授業から脱線した話だけは一生懸命聞くやんちゃな学生に見えて、部長は少し微笑んで、徐々に熱のこもるその話を続けた。
「子供が少しずつ大きくなってくるだろ、そうするとどうなると思う？じいちゃんばあちゃんがえらくかわい　がるんだな、甘やかすんだよ。だから私の息子は随分とわがままに育ってしまった」

「そんなん親次第でしょう？俺が言うのもなんですけど」
「確かに、山下君よりは人間ができているような気がするな。まあ、気を悪くしないでくれ、ただの親ばか　だ。ま、話を戻そう。さっきも言ったけどね、私は婿養子なんだよ。指導方針があってもそれは議題に挙　がるだけなんだ。決めるのは家長なんだよ。そんなわけで、私の息子は今でものびのびと育っているよ」
　それは悲しいですね、と山下が呟いた。同情というよりも、部長を人間的に評価したうえでの言葉のようだった。それはこの短い時間の中で自分を理解しようと努力する姿を見た山下なりの歩み寄りなのかもしれない。
「そんな息子も今ではすっかり大人になったんだろうね。どこの女だか分からないが、子供ができたとかで　結婚したんだよ、去年だったな。じいさん達はひ孫に随分喜んでいるみたいだったんだが、私はさすがに　素直には喜べなかった。その女って言うのがまだ１７歳なんだ。高校を辞めて結婚するって言うんだよ。そ　んなもの許せるわけがない。息子もまだ大学を卒業したばかりだったし、食っていくことも難しい。」
「部長がその嫁さんのことを女って呼んでる時点で、未だに許してないのも分かりますよ」
「ああ、失礼。美亜さんと呼ばなきゃならなかったな」
「みあって名前がもうすでに、最近の子って感じっすね」
「私もそう思う。向こうの親御さんも随分と素敵な人たちだった。結婚式なんてしなくてもいい、当人たち　が納得してるんだからいいじゃないか。そちらの息子さんは責任をとる義務があるんだろう。どうしても　結婚式をしたいならそちら側で全部持ってくれと、おっしゃられた。喜んで全て負担したよ、家長がね」
「傍から見たらどっちもどっちって言われますよ、それ」
　どっちもどっちなんだよ。部長は自分で自分の話に嫌気がさしたのか、仕切りなおそうと山下のタバコを一本つまんだ。山下は無言でそれを受け入れる。そして自分も一本取り出し、二人分の煙が部

屋を埋める。時間のように、緩やかにそれは天井を這う。
「それでも私はそれをただ黙ってみているしかないんだ。嫁も何も言わない。むしろ何か言われた時が私の　最後なんだろうがね。とにかく全てを肯定していた。婿養子とはそういうもんなんだ、と自分に言い聞か　せて」
「中でも外でも自分の思ったこと言えなかったらつらくないすか？俺耐えられないな」
「ああ、たぶん山下君が思っている以上につらいことだよ」
部長はそこで一呼吸置いた。まるで話の佳境がここだ、と教えるような沈黙だった。山下は社交辞令もかねて話を促す。それはとても自然で嫌味のない、部長にとっては最適な言葉だった。
「で、部長は何を決めたんですか？勝手に車でも買ったんですか？」
部長は紙を見つめた。山下について、彼の性格、性質、キャラクター。書くべきことは今の独演の合間にもいくつかあったように思える。少なくとも彼に対する最初の印象とは随分と変わってきている。きっと山下個人の抱える問題というものは意外と少ない。そう、彼の息子のように。
部長は、シャープペンシルを二三度ノックした。それが合図だった。
「離婚したんだよ、先月」

3．記憶と思い出

後日、担任に呼ばれて僕は職員室に向かった。電車通学の僕にとって放課後何かにつけ残るということは、田舎の人間なら分かると思うが、死活問題だった。電車は早くて３０分に一本。通勤通学の時間帯を逃せば４５分に一本になってしまう。電車に乗り遅れるということはそれが直接的に帰宅の遅延を意味する。六時までには家にいたかった僕にとって、たとえその用事がノーベル平和賞受賞の連絡で、今受理しなければ受賞を取り下げるといわれても、ただの障害物でしかなかった。今思えばなぜそこまで帰る時間に執着していたのか疑問だが、きっと当時の僕にとっては、それら全てがよどみなく進行して一つの生活だったのだろう。神経質だと、確かに自分でもそう思う。

ただその日は、すでに友人と遊ぶ約束をしていたので、普段よりは比較的素直にその指示に従った。とはいえ友人を待たせている分機嫌は良くなかったので、それをひた隠しにする必要はあったけれど。

職員室に入ると、うれしそうに担任が僕を手招きした。

可もなく不可もない生徒が職員室に行くことは稀である。教科担当の教師たちが珍しそうに僕を一瞥する。僕はその全てを無視して担任と向き合った。

「おお、来たな。まあ、そう硬くならず。そこ、座れよ」

「いえ、用事が終わればすぐ帰りますので。友人も待たせてますから」

「そうか、じゃあまあ手短に話するか。あの、お前が書いたあの小説あったろ」

「ええ、受験のストレスに負けて書き散らした奴ですね」

「おお、そのやっつけ仕事。あれなんだけどな、もう少し続き、書けないか？」

は？と僕は声に出してしまった。職員室に静かな笑い声が響く。
「は？じゃなくて。あれ、面白いからさ。個人的にもう少し読んでみたいんだよ。だってお前、あれ途中だ　ろ？」
僕は職員室を出るべく踵を返す。
「個人的に、というお話でしたらお断りします。あれは宿題ですから。作品では有りませんので」
担任が椅子から立ち上がる。慌てた様に、それでも必要以上ではあるが、大きな声で僕を呼び止めた。
「おいおい！冗談だよ！待て。本当にお前は冗談が通じない奴だな。面白いって言うのは本当だが個人の嗜好　のためじゃない。お前がその気なら、県の小説コンクールに出すから、もう少し書かないかって言ってる　んだ。出すとなると、規定枚数が４０枚以内まで増えるからな。あの話ももう少し細かく書けるだろ」
僕は首だけを担任に向けると、努めて爽やかに微笑んで、それもお断りします、と職員室を出た。大きな声が僕の耳を引っ張ったが、僕はそれ以上の声で失礼します、と一礼をして僕を待つ友人の下へ走った。
僕は彼のことがもう何も分からない。彼はきっと、僕の知らない何かなのだ。だから、僕が手を加えるわけにはいかない。理解していないのに、理解したふりをしてはいけない。それはきっと、みんながつらいだけだから。そんなことは誰も望みはしない。
「お前がそれならいいけどな！あれ、ほんとに面白いぞ！プロが言うんだから間違いない！コンクールに出　したら絶対何かしら賞取れると思うから、気が向いたらいつでも言いに来いよ！〆切は一ヵ月後だ！」
職員室の扉から飛び出してきた担任はそう叫ぶと、恥ずかしそうに中に戻っていった。
僕は別に賞が欲しくてあれを書いたわけではない。ストレス発散。ちょっとした逃げ道。宿題の一つ。細切れの何かなだけだ。担任が面白いとさえ言わなければ。

ただ、僕はそれだけで十分だった。僕は足を止め、職員室に一礼すると、少しゆっくり歩き出した。きっと担任は僕を褒めたのだろう。でも僕にとっては、そうではない。彼は、あの形を成さない彼は、それでも褒められたのだ。よかった。僕は心から思った。本当なら僕がしなければならないことを他の人がしてくれた。僕はやっと、彼を心から手放すことができた。

その日は随分暑かったけれど、僕にとっては随分すがすがしい、まるで初夏の朝のような、気持ちの良い夕方だった。彼は小説として、あと一ヶ月担任の机の中で眠る。それはきっと彼にとって心地の良いものなんだろう、と僕は思った。

山下は、立ち上がろうとしていた。ジュースを買いに行きたかった。エアコンをもう一度つけに行きたかった。何より、そんな悲しい話をしていて満足そうに笑っている部長が、さっきまでの部長と別人に見えて、ただ単純に、恐ろしかった。

「まあ、そんな重い話じゃないんだ。言っただろう？私は虐げられていたんだよ。随分とひどい扱いを２０年　以上も受けてきたんだ。山下君だってひどいと思っただろう？だから離婚した。離婚した理由はきっと世　の中の夫婦の数だけあるだろうけど、僕の離婚の理由は割と理解されやすい方だと思うよ」

「あの～、反対されなかったんですか？」

そりゃされたさ！部長は新しくタバコに火をつけて矢継ぎ早に語る。初めてテストで１００点を取った小学生のように無邪気に。

「特にじいさんがひどかったよ！お前はうちの名前に泥を塗るのか！ってね。ばあさんもひどかったね。そ　の話をしてから私の食事はなくなってしまったんだ。ああ、うちの嫁はろくに料理ができなくてね、大概　はばあさんが作っていたんだよ。古風な和食でね。嫌いではなかったんだが、私は肉が好きだからたまに　つらいときもあったなあ」

「話をしたのはいつなんすか？その、離婚の」
「息子が結婚してすぐだよ。私の責任は果たした、と思ったからね」
確かに、タイミングとしてはそこしかないだろう。山下は納得し、部長の断固たる決意を理解した。彼はきっと、ずっと、言おうとしていたのだろう。でも言えなかった。そして、いつ来るとも知れないその話題を口にする権利が自分に与えられる日を、虎視眈々と狙っていた。それこそ２０年間。２０年。俺は一つのことをそれほど長く考えることなど到底できないな。山下は、若干の尊敬を持って話を続けた。
「なるほど。それはマジ、自分で決めてやったって感じっすね。ただ、ハンコでしたっけ？よくもらえましたね。」
「ああ、全てをあの家に置いてきたよ。それが条件だった。自分を放棄すること。どうやっても私を幸せにしたくなかったらしい。シャープペンの芯から小学生の頃の写真から、価値のあるものからないものまで全てをあの家に捨ててきた」
「え？いいんすかそれ？貯金とかもってことっすよね？」
「当然だよ。見せていた金は全て置いてきた。自由に比べれば、随分と安いものだよ」
見せていない蓄えは当然あったがね、と部長は付け足した。
話を始めてからの部長は先ほどまでの神経質な男ではなくなっている。しがらみを忘れ、責任を無視し、当初の、山下の表彰の一端を探ろうという趣旨すらも忘却した、それは一言で言えば随分と自由な姿であった。
「私が自分で決めたことは、恥ずかしながら半世紀ほど生きてきて、これくらいのものだ。しかも随分と後　ろ向きな決定事項だがね。山下君、満足できたかい？」
山下は振り子のように何度か頷くと、部長を正面に見据えて、ありがとうございました、とはっきり話した。精悍な表情の彼は、そうしていれば随分と優秀な人間に見えた。
「マジいい話でした。部長、この話みんなにしたらたぶん部長の評

価ガツンと上がりますよ。かっけーす　わ」
「君にそう言われるとそんな気もするけれど、誰にでもする話ではないよ。近しい人間以外に話したのは君　が初めてだ」
「マジすか、ありがとうございます。でも、そんな話聞いたら、ますます俺って人から言われて生きてるだ　けだなーって気がしてきました。自分で決めたことなんてないですもん」
　私も先月までは同じだったよ、と部長は呟いた。そして、
「そうだ、じゃあここだけの話ということにして、人には言いにくいけれど、自分の中では自分の自慢だっ　たり、自信だったりすることをこの紙に書いてくれないか。書きたくないものは書かなくてもいい。私を　信用している、その範囲内でいいから、何か書いてみてくれ。そうすればきっと私は君をもう少し理解で　きると思う。そもそも私は君を評価するために今日ここにいるんだからね」
と続けた。そこには外から、上から山下を評価しようとする部長はいなくなっていた。
　山下は声を上げて笑った。無邪気な少年の笑顔だった。
「そうっすよ！俺全然しゃべってないすもん。分かりました。じゃあ書ける範囲で書いてみます。俺、字汚　いし、時間かかると思いますけどいいすか？」
「夕方の四時を回ったら、私たちくらいの年になるともう後は同じようなものだ。特にすることもない。明　日の朝までに終わってくれればそれでかまわないよ」
　わかりました。と、山下はペンを借り、いそいそと書き出す。
　そうか、最初からこれができていれば、今頃私は家に帰ってビールが飲めたのかもしれないな。部長は小さく自嘲して立ち上がると、コーヒーを買いに行ってくる、と部屋を出た。山下は返事をしなかった。いや、もしかしたら聞こえていないのかもしれない。集中力は随分立派なのかもしれないな、と部長は静かに扉を閉めながら考えていた。時刻は午後４時１２分。一日は短く、だからこそ今が長い。

僕の卒業した高校には、年に一冊発行される記念誌のようなものがあった。そこには教師の言葉や、部活動の年間成績、各学年、各クラスの紹介文などが載せられ、全学年を通してそれなりに楽しめる（学校にさえ来ていれば、本のどこかに必ず自分との接点を見つけられる）つくりになっていた。年始にはクラスの代表が集計、編集などを行い、担当者に提出する。担当者は大概生徒会の三年生（もしくは推薦入試で大学が決まっていた暇な人間）が行う。

記念誌のポイントはなんと言っても全ての部分で生徒が主役であることを認識できるところだ。表紙、題字はもとより、デザイン、装丁に至るまで全てを生徒だけで行う。金銭面においての学校からの支援はあるものの、その完成品を見た担当者は感動を余儀なくされるほどの苦労をし、充実感を得る。とはいえ、例年責任感の強い担当者が選出されるだけあり、トラブルもなく、スムーズに発行されている。

完成した記念誌は、クラス替えの直前に配られ、最後の別れを惜しむきっかけや回顧などに用いられ、高校生活の一ページを鮮やかに彩るのに一役買う。思いのほか学生からの支持も多く、発行の歴史は３０年を超える。歴史と伝統と人気を兼ね備えた、なんとも万能な本だった。

詳しく説明をしてみたものの、実際のところ僕がこの本を手に取ったのは、卒業間際の一回限りだった。

理由は簡単で、学年末に机の中身を全て学校に捨てて帰っていた僕の『要らないものリスト』の中に、彼が毎年ノミネートされていただけだ。

さすがに、卒業生が教室のゴミ箱を埋めて飛び立つわけにもいかず、一月末から徐々に荷物を持ち帰っていた結果、僕は初めてその由緒正しい本を手に取ることができた、というわけだ。

「あー、この本はこの高校全ての生徒が協力して作り上げた一つの

作品だ。特に興味のないこと、自分には　関係のないことばかりが書いてあると思うが、それも記念と割り切って大切に持ち帰るように」

担任は、授業後の伝達事項に合わせてそんなことを言うと、各生徒に手渡しで配りだした。高校生活最後の部活動に励んだ人たちは、自分たちの過去の成績を再確認し、その頃の苦労や努力を、あの時得た感動をもう一度味わっているようだった。

イベントなどの記載も多く、修学旅行に行った二年生はその感想を、文化祭に全力投球した三年生はその情熱を寄稿し、読み返せばいつでもあの自由で不規則で曖昧な時間に立ち返った気分になれるようだった。

部活にも所属せず、文化祭などでも目立った働きをしなかった僕は、自分のクラスの紹介文にみんなと共に寄せた一言自己紹介の中にしか自分の存在を認識することができず、やはり今年もいらないかな、なんて本とゴミ箱を交互に眺めたりしていた。

全ての本を配り終えると、伝達事項は終わる。日直が号令をかけ、一日が終わる。

そのリズムを担任が破った。

「実は、最後に言いたいことがあるんだが」

と言って、唐突に黒板の前に僕を呼んだ。

全ての生徒が、当然僕を含めて、きょとんとしていた。改めて名前を呼ばれるにふさわしくない人間が突然フラッシュを浴びたことに、そこにいる全ての人が戸惑っているようだった。中には露骨に帰宅を邪魔されて迷惑な顔をしている奴もいた。気持ちは十分分かる。逆の立場ならば、きっと僕がそうしていただろうから。

担任はそんなみんなの言い知れぬ不自由さを無視するように続けた。

「今回の記念誌の１２３ページを開けてくれ。ここには夏休みに小説を書いた生徒の中で、優秀だった作品が載　っている。まあ、学校での審査を経て、県のコンクールに出し、それ以上の評価を得た

もの達の分だけだ　がな。彼らの作品は、売り物にしてもいいようなものも有る。非常に完成度が高いし、何より面白い。君　達も暇があったら読んでみるといい。そう長くはない。規定枚数があるからな。で、だ」

担任は机の引き出しを開けた。中からは記念誌と同じサイズの紙が大量に出てきた。それこそ山積みと称するに憚らない量の紙が。

「今からこれを配るから、これを１２３ページ一番頭から順にはさんでいってくれ。１ページ目から順に置いて　いくから、一枚ずつとって持っていってくれ」

「先生、落丁ですか？」

一人の生徒が心配そうに手を上げて発言した。違う、と先生は答えた。

「そんなへまをやらかすような担当じゃないだろう。あいつらはよくやったよ。で、この紙はな、松田が夏　休みに小説書いたの、みんな覚えてるか？それだよ。一枚も残さずきっちりはさんでくれ」

僕は一人狼狽していた。言われるがままに紙を挟んでいくクラスメイトは、必ず僕と紙を一通り見てから自分の机に戻っていく。そこには賞賛も賛美も、否定も侮辱も何もない。ただライン工のように順にメニューをこなす義務感だけがあった。

全員が紙を挟み終わったのを確認して、担任は続けた。

「松田の小説は、はっきり言って中途半端だ。中身も書きかけだし、何よりこの作品をなんとしても読んで　もらいたい、という情熱に欠けている。ただね、私はこの話がすごく好きなんだ。単純に面白い。ちょっ　と悔しいとすら思った。だから、うちのクラスの分だけ刷って、お前らにだけは読ませようと思ったん　　だ。面白いか面白くないか、そんなものは個人が判断するものだから一々誰かにいう必要もない。ただ、　同じクラスにこういうものを書いて、そしてそれを面白いと思う人間がいたってことを忘れないことは、意外と重要なんじゃないかと思うんだ。こいつは宿題としてしかこの作品を見ていなかったから、量も少　ないし、当然何の賞も取っ

ちゃいない。ただ、俺はこの小説が、今回この記念誌に載っている全ての文章　と比較しても一番面白いと思う。だから必ず１２３ページにはさんでくれ。これは俺の独断だが、担任命令　　だ。よろしく頼むぞ。」

松田、ありがとな。担任はそういって僕の肩を二回叩いた。そして僕はなぜか、もう帰りだす生徒がちらほら出だした午後４時２５分にクラスメイトから珍妙な拍手喝采を送られることになった。

恥ずかしいのと、どう対処していいのか分からないのとで、僕は一人中空を見てぼんやりと、これでこの本が捨てられなくなってしまったな、なんて考えていた。そして、いつかまた、僕もこの小説を読み返せる日が来るのだろうか、とぼんやり思い、小さく右足を壇上から下ろした。小説家になれ、なんていう野次と喝さいの中、僕達の記念誌は他のクラスの生徒よりもほんの８ページ、分厚くなった。

4．こんばんはとありがとう

コーヒーを両手に部長が部屋に戻ると、紙は随分と黒く姿を変えていた。山下はただ黙々と紙を埋め、部長が帰ってきたことにも気づいていないようだった。

「あんまり根を詰めて書かなくてもいいから。大体でもいいからな」

「ああ、大丈夫っすよ、できるだけ読みやすくなるよう気をつけてますんで」

山下はそういうと再び紙に視線を落とした。右手は忙しく走り回り、ペンの音が乾燥した部屋に無機質に響く。

部長はここに置くから、とコーヒーを山下の前に差し出して、自分は早々にふたを開けると、ぼんやり外を眺めた。空は濃密さを増し、まもなく夜が来ることを教えていた。冬は日が落ちるのが早い。蛍光灯の明かりが自己主張しだし、部長の手元、コーヒーのラベルを強く照らした。

「雪は降らないで欲しいね」

「そうっすね。ここら辺の人はスノータイヤ持ってないすからね。めっちゃ怖いっすよ。あ、書けました」

山下は紙とペンを部長に差し出す。紙には『俺の自慢ベスト5』と銘打った太い文字のタイトルの下に、箇条書きで5つの自慢、自己形成の要因とも取れる出来事が羅列してあった。

部長はその一つ一つにゆっくり目を通す。内容だけではなくその文字の形、バランス、大きさ、全てを吟味し評価しているような、極端に時間をかける見方だった。

「この、第5位『とばっちり恋愛事件』ってのは詳しい出来事が書いてないけど？」

「ああ、それは書ききれなかったんで、直接話そうと思って空けときました。聞いてもらえます？」

「もちろん。そのために私はいるんだよ」

部長は山下が書き汚した紙とは別の紙を、鞄からすばやく取り出した。はじめは使うつもりもなかった、評価用の予備の紙だ。部長は紙を置きペンを握り、山下の発言を極力聞き漏らさないよう、要点を抑えられるよう準備した。その右手は獰猛なガゼルのように機会をうかがっていて、まるで発言全てを書くことが目的かのような、妙な緊張感すら見て取れた。まだ中学くらいのときの話なんすけど、と彼は声を並べ出し、部長はやわらかい笑顔でそれに答える。時刻はもう6時を回り、辺りは薄暗くなり始めていた。

「で、結局、ツレがそれで納得した、って話しなんすわ」

山下は、第2位の「喫煙予防キャンペーン」について説明し終わったところだった。気がつけば全てのテーマについて彼は背景と詳細を話しており、部長の用紙は4枚目を黒く埋めきっていた。

「ちょっと手が疲れたし、休憩しないか」

部長の一言で、彼は椅子から立ち上がる。

「コーヒーでいいんすか？」

山下は、次は俺のおごりで、と小銭入れを取り出した。

「じゃあ、コーラにしてもらえるかな。実は苦い飲み物っていうのが苦手でね」

部長はそう言って照れくさそうに笑った。

「なんすか、じゃあさっき言ってくださいよ。俺コーヒーでもよかったのに。てか、二回目もコーヒー飲んでましたけど？」

「部長はコーヒーって決まっているんだよ」

「会社では、すか。あほくさいんで、そういうのはなしで。じゃあ、ちょっと行ってきますわ」

山下は廊下を、休み時間のように走りぬけていく。遠くなる足音を、部長は無意識に追いかけていた。

あいつは、なかなか面白い奴だな。そもそも、俺にはあんな勝手な行動なんてできやしない。馬鹿げているとは思うが、若いってのは、いいもんだな。

彼は、若い青年の自由さを羨んでいた。が、それを除いてもどこからか浮かんでくる思い、まるでクラスのヒーローと一緒に遊んでいたときのような、自分も強くなったような感覚を彼は感じていた。根拠のない自信に、身をゆだねる。

時刻はもう２０時を過ぎ、会社の中にいる人間は少ない。そういえばこの会議室の使用許可も、１８時までしかとっていなかったな、と彼は今更思い出し、そしてすぐにその記憶を捨てる。どうせ誰も来やしないんだ、使う奴がいないなら、好きにしてもいいだろう。就業時間外の雑談だと思えばいいのさ。

ふう、と息を吐き、天井に向けた視線をタバコに落とす。と、山下が久しぶりに早く家路に着けた父親のようにドアを開けた。

「なんか、俺もコーラにしてみました。でも、３５０と５００買ってきたんで、好きな方選んでいいっすよ」

そういうと、高さの違う缶をこと、と机に置いた。

「一つだけ残念かもしれないことがある。５００を私の分だとするなら、山下君は私の年齢を考えるべきかもし　れないな」

言い切るのが早いか、彼の右手は５００のプルタブを開く。彼は、合計1リットルのコーラを胃に流し込むつもりらしい。部長は、ならいいんだ、と３５０に手を伸ばし、人懐っこい笑顔の山下に答えた。

「さて、残りは1位だが、1位は何も書いてないんだよね。これはどういうことかな」

と、部長が切り出す。本来1位こそが、彼を評価する一番の基準であり、指標である。

「実は、1位って、正直選べないんすよ」

山下は、ポケットから新しいタバコを取り出して、火をつけた。

「なぜ？あれだけいろいろなことがあったんだ。君を形作った素敵

なことがあったんじゃないのかい？」
「そうなんすけどね。あの、今更なんすけど、部長の1位ってやっぱ離婚ですか？」
　山下は聞きづらそうにそうつぶやく。本当に子供のようだな、と部長は彼の目を見る。
「いや、離婚は2位だ。1位は違う」
「それって何歳くらいの出来事ですか？正直、俺、まだまだすげーことがこれからいっぱいある気がして、　1位ってつけたくないんすよ。ほら、一回1位選んじゃうと、それが基準になりそうじゃないっすか。それ　が嫌で」
　大丈夫、と部長は言った。日曜の午後のような、緩やかな声だった。
「1位は、自然に1位になる。こと、対戦相手がいない順位において、1位はおそらく、始めから決まっている　んだよ。だから、心配しなくてもいい。僕の1位は、18のときの話だ。君がまだ1位を選べないというのな　ら、それは出会っていないからなんだ。そのうち出会うさ」
　彼は、言い終わるとその日10本目のタバコを吸う。その煙は、のんびりと天井を目指す。まるで世界のその先が天井にあるかのように。
「そんなもんすか。まあ、じゃあ、あれが1位でいいか。そもそも自慢とか、そういう話じゃなくて、なんか　すげー覚えてて、自分的には大事な言葉なんすけど」
　そういうと山下は照れくさそうに頭をかいた。長い、社会人に似つかわしくない髪がわしゃわしゃと彼の額を動く。
「なんだ、1位、あるんじゃないか」
「まあ、はずいんで、書かないようにしただけなんすけど」
　山下の視線が壁に固定される。そして、言葉を続ける。直接言うのは恥ずかしいから、壁に一度跳ね返った言葉でもいいかい？と、彼の目がそう言っている。

「1位は、親父に言われた言葉です」
親父、もう随分そんな言葉使ってないな、と部長の耳が告げる。
「俺の親父は、まあ、小さい工場のラインなんすけど、自慢が一日も休んだことがない、ってことなんす。　それで皆勤賞とかもらってたんで、本人は満足そうでしたけど」
あ、この話、長いんすけどまじで帰る時間とか、と山下が言うのを、部長が制する。大丈夫。その一言は、山下が続きを話すに十分な優しさと強さがあった。
「じゃあ。で、1日も、ってのは会社がある日だけじゃなくて、休みでも不良品とか、事故とか、なんかある　と必ず、しかも自分と大して関係ない事件にも首突っ込んでたらしいんすよ。一回工場が火事んなったと　き、結局3週間家帰ってこなくて。母親が毎日弁当作って持ってってたのすげー覚えてます」
部長は、おそらく自分とよく似た年であろう山下の父を想像する。
「すごいお父さんだ」
思わず言葉になんの不純物も含まず、そうつぶやいた。
「今ならそう思いますけどね、ちょっとかっけーな、とか思いますよ。でも、あのころは最悪でしたよ。い　つもいねーし、俺、妹いるんすけど、妹なんて親父が親父だって分かったのが6歳すからね。それじゃ父親　として意味ないでしょ」
まあ、確かに。二人は頷いて、会話が続く。
「でね、俺が高校1年のときかな。学校休んでゲーセン行って、ちょっと早く家帰ったんですよ。4時くらい　かな、そしたら親父がいるんす。意味わかんないでしょ。いつも家にいないのに、そんなときだけいるん　す。うわ、うざって思いましたよ。説教好きな親父でしたからね。で、俺が顔合わさずに自分の部屋行こ　うと思ったら、おい、って呼び止められたんす。とりあえず、なに？っつって正面に座って。そしたら親　父が見たことないような笑い顔して、もうにっかーってしてるんですよ。そんで『俺な、仕事辞めるわ』って。あの親父がですよ。家より仕事優先の親父が。仕事やめるっ

て。正直、金なくなるじゃんとか、そん　なこと全然思わなくて、そんなことより、親父が親父じゃなくなるんじゃないかって、そんなんばっか考　えちゃって、そしたらパートからちょうど母親が帰ってきたんです。こんな時、なんかちょっとすげーな　って思いません？偶然て。」

二人は同時に咳払いをする。その音は、偶然に対するきっちりとした同意の形をとって二人の間に落ちた。

「で、親父が、おんなじことを、さっき聞いたよってくらい同じ感じで言って。そしたら母親はなんつった　と思います？」

どうして？と部長は言った。自分ならきっとそう言うだろう。そう言ってしまうだろう。彼を信じてい　る、でも彼が決断した理由が分からない。寂しいけれど、それがきっと他人と暮らすということなんだ。

「そう、って言って、夕飯の支度しだしたんすよ。意味わかんねっしょ。で、俺が母親に食って掛かって。　親父やめるんだぞ、どうすんだよ、って聞いたら、『やめるんでしょ、それだけじゃない』って。困ると　か、変わるとか、そんなこと全然考えもしないって感じで言って。正直ちょっと怖かったです。こいつら　なんなんだって。そしたら親父がちょっと出かけてくる、って言うから、呼び止めました。意味わかんね　ーからって。親父は靴はきながらにやっと笑って、やめるって、すげーだろって。言ったのはそれだけです」

ははは！と、無邪気な笑い声が部屋に響いた。部長は、松田はその言葉の意味が驚くほどよく分かった。分かりすぎて、自分も思わず辞めたいと思ってしまったほどだ。

「それはすごいよ。君のお父さんは、かっこいい人だな」

「自慢の親父ですけどね。でもあん時はまじでわかんなかったすね。正直今もそんなよく分かってないんで　すけど。でも、あれが、俺の1位だと思います。親父の言葉なんで、なんか照れくさくて言うつもりなかっ　たんすけどね」

その言葉の意味に君が気づくとき、君はきっと素敵な大人になるんだろう。部長はふと天井を見上げた。会議室のそれは恐ろしく無機質だが、なんとなくその向こうの夜空が、今日だけは透けて見えるんじゃないかと思った。

さて、その学校誌だが、今ではもうなくなってしまった。全てを捨てる、という中に含まれていたのだから、それは仕方のないことだ。きっと僕の人生にまったく興味のない人間が、世界に関心を持たない炉にくべてしまったのだろう。灰は、廃棄されるなり、肥料になるなりして循環する。そこに思いなんて残っていなくていい。残っていたって困る。あれは、僕だけの宝物なんだから。

「で、この話を受けて、部長はなにするんすか？」
「私なりの考査を経て、君の上司に評価を委ねるんだよ」
「え？部長が評価するんじゃないんですか？意味なくないすか？」
「意味はあるよ。君の上司は私の後輩だ。嫌とは言わせないよ」
そうやって、松田は笑う。無邪気な十代のような、屈託のない笑顔だった。
「じゃあまあいいか。でも、あんま恥ずかしい話しないでくださいよ。そもそも俺は、賞なんて別にいらな　いんすから」
「仕方ないだろ、会社のルールなんだから」
モチベーション向上施策だかなんだか知らないがね、と付け加え、彼はタバコを銜える。
「あれ？部長的にはそんなん言っちゃだめっしょ。怒られますよ、次長とかに」
「君は、僕がそう言ってたと誰かに言うのかい？例えば次長とかに」
「言うわけないっすよ。ああ、建前ってやつすね。まかしといてください、俺そういうの絶対言わないん　で」

言ってもいいよ、と彼は言い、言いませんと彼は言う。そういや、と言ったのは、どちらだったか。
「言葉の意味だけど」
松田が紡ぐ。山下が拒否する。
「あ、自分できちんと分かるまで、言わないでくださいよ。いちおう親父の年までには分かってる予定なん　で」
山下は、人差し指で自分の唇を抑え、松田の言葉を遮る。松田はそれに従う。緩やかな沈黙。
「それがいい。それがいいと思うよ。それが分かれば、きっと君は社会人として面白いやつになってるだろ　う」
だといいんすけどね、と山下が少し照れて笑う。親父が本当に好きなんだな、と松田は彼を見た。
「あ、さっきの話、実は続きがあって」
と、山下は思い出したように付け足した。
「そうか、じゃあせっかくだから最後まで聞かせてくれ」
はい、と山下は椅子に座りなおす。
「そのあと、妹が学校から帰ってきて、親父に同じこと言われてるの見たんです。あいつまだそんとき中２　で、どうせ金の心配とかするんだろうなと思ってたら、違うんすよ。おめでとう、って。それってなん　か、俺負けた気しません？」

山下が帰った後、会議室の片づけをしながら松田はふと、自分の子供のことを考えた。今頃息子は何をしているのだろうか。ちゃんと仕事をしているのだろうか。そして、俺は今でもあいつから父親と思われてるのだろうか。思考は不安となり、彼を優しく締める。
２１時を過ぎた会議室は、彼を悩ませるに十分な暗さだった。
机の上には、紙が数枚、乱雑に置かれている。これをパソコンで

まとめ、フォーマットにはめるため、彼はあと二時間ほど、会社に残ることになる。それを思い、松田は一人フォーマット、と呟くと小さく笑った。あいつをこの会社の物差しで計る？バカらしい。

無理難題に、きっと私は社会人経験を精一杯動員して、真実のような嘘を四角い用紙に並べるのだろう。それは、宿題と同じ、無機質な物だ。でも、今日あいつと話した時間は、そう悪いものじゃなかった。なら、それを私がわかっているだけでいいんじゃないか。彼は、山下は、きっとそういうことが分かる奴だ。今度、飲みに誘ってもいいかもしれないな。そうだ、そうしてみよう。あいつの上司が、随分と驚きそうなものだけどな。

松田は自分が、少しだけ変わった気がしていた。そしてきっとそれは、意味のある小さな一歩なんだと感じていた。誰にも評価されないけれど、確かに大切な何かを、自分の子供のような奴に教えられた、その妙な喜びを、彼は乾いた両手で壊れないようにそっと包んだ。

会議室を出た後、山下は父親に電話をかけた。父親は騒音の中で、パチンコ屋だと思われるが、今度かえって来い、とだけ言って電話を切った。彼は意味ねー電話、と一人ごちて、笑った。帰ったら沢山話そう。すげーいいことあったって。そう思って笑った。随分と、星が明るい夜だった。

小さいときは人一倍賞状をもらった僕だけど、習字だったり作文だったり、それが一体いつ、どういった理由でもらえたのか、今で

は一つも覚えていない。でもただ一つ、あの時僕の書いた読書感想文を読んで母親が無言で僕の髪を撫でたこと、それだけは覚えている。つまり、賞ってそういうことなんだろうと思う。

4．こんばんはとありがとう（後書き）

ちょいと前に書いたものなので何んとなく今と伝え方が違う気がしますが、
それも味と割り切って推敲しないことにしました。
感想などあると何んともありがたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5001n/

何か特別な賞をもらったことはありますか？

2010年10月8日14時28分発行